

【論文：児玉九十】

『教育週報』と児玉九十（1）『教育週報』による児玉九十の評価

廣 嶋 龍太郎*

“Kyoiku-Shuho” and Kuju Kodama (1) Opinion about Kuju Kobama’s works on the Kyoiku-Shuho

Ryutaro Hiroshima

キーワード：児玉九十、『教育週報』、日本教育史

Kuju Kodama, “Kyoiku-Shuho”, history of education in japan

はじめに

児玉九十（1888-1989）は大正期から昭和期の教育者であり、戦前においては成蹊学園の主事を経て明星実務学校（のちの明星中学校）の校長を務め、戦後においては明星大学を創設し初代学長を務めた人物である。拙稿「児玉九十著作目録の再検討（1）」（『明星—明星教育センター研究紀要』第4号）では、系統立ってまとめられた著作集のない児玉の著作目録を作成したが、その中で特定の掲載誌に複数の寄稿が見られることを指摘した¹。そのことを受けて、本稿では『教育週報』を対象に資料を検討し、同紙による児玉の評価について論究したい。

次に『教育週報』と児玉九十の関係についての先行研究を検討したい。児玉九十の著作集である『この道五十年』には、『教育週報』に寄稿した「学制改革重点」²、「長期建設に対応する教育」³、「わが校の非常時教育」⁴、「中央協力会議に於ける中等学校問題」⁵の4点が収録されている。しかし、児玉九十自身への人物評や児玉九十の著作への書評は収録されていない。また、児玉九十の自伝や回顧録として出版された『児玉九十自伝』と『明星ものがたり』には『教育週報』への言及はなく、その他の児玉九十に関する研究論文も少なく、『教育週報』との関係にふれたものはない。したがって、『教育週報』と児玉九十の関係についての先行研究は十分ではなく、本研究の意義が認められる。

研究の方法としては、『教育週報』における児玉九十の人物評と書評を検討し、同時期の他紙として読売新聞の記事と比較する。なお、児玉九十談もしくは児玉九十による寄稿とされる記事については次稿で取り上げる。本文中の旧漢字は適宜新漢字にあらため、縦書きを横書きとするため「くの字点」については「ゝ」や「ゞ」と表記している。

1. 『教育週報』とは

『教育週報』は1925（大正14）年に藤五郎によって創刊された日本最初の本格的な週刊教育新聞であり、戦時下の新聞雑誌統合によって1944（昭和19）年に終刊となるまで全974号が発行された。また、1940（昭和15）年に大阪支局と新潟支局を設置し、東京、大阪、新潟で地方版を発行していた。記事については署名の有無が分かれており、編集体制は明示されておらず、どの記事に誰が関わっていたか不明なものも多い⁶。1986（昭和61）年に中野光によ

* 教育学部 准教授 日本教育史

て大空社から復刻版が出版されており、本研究でも復刻版を参照している。

創刊者の為藤五郎は1911（明治44）年に東京高等師範学校を卒業し、小倉師範学校、鹿児島師範学校の教師を務めた。教師を辞して上京すると、野口援太郎らとともに「池袋児童の森小学校」の創設にかかわるとともに、『教育週報』の発行にも携わった。その後も帝国教育会や茗溪会などの団体の役員として活躍するとともに、地方議会や国政にも立候補し社会民衆党の東京府議員等の政治的活動もした人物である。大正自由教育の研究者である中野によると、為藤は「大正期に民間教育運動の隊列に加わった気鋭のリーダーのひとり」であり、「教育ジャーナリストとして頭角をあらわした人物」であったと評価されている⁷。

為藤は、1925（大正14）年発行の『教育週報』第1号の1面において、「教育時代に面して一創刊の辞に代へる」と題した創刊の辞を掲載している。その記事の全文は以下の通りである⁸。

日本の教育は永い間下積にされて来た。五年十年の間に政治、産業、外交、学術、社会問題等、皆それ々の程度に於て、進展の跡を示して来て居るが、懸値なしに言つて教育は夫等の何れにも劣つた行程をしか歩み得なかつた。それは「求めて得た教育」でなく、「与へられて得た教育」であつたがためであり、在来の為政者が、党利にのみ捕はれて最も利権問題に縁遠き教育問題に眼も呉れなかつたがためであり、また民情に通ぜざる官僚政治家が、一夜造りの教育政策を時代錯誤の頭脳と思想とによつて試みようとして来た結果であることは、否み難き事実であつた。

然し、教育を下積にして置いて新時代の政治を行ふことの危険は、政業者流の党略本位から考へてさへ、十分に判つて来た。教育政策を誤つたがために、内閣の致命傷をさへ孕ませられたことは、最近数代の内閣に折々見せつけられる事実である。教育時代が今将に現出されて来たのだ。

◇

しかし、その基礎工事よりして改築してかゝらざる限り最早柱の立直しや、壁の修復や、襖の張換位では間に合はざる程度にまで、日本の教育制度は朽廃し切つて居る。年々歳々、大小数百の教育会議が全国に開かれ、議せらるゝ議案数百数千を数へながら、窮極は「議論倒れ」以上の成果を得ない所以は、言はずもがな教育制度、その方法の上に大改革の要あることを語るものでなくて何ぞ。

普選は布かれた。「与へられたる教育」より、「求めたる教育」にまで進むべき絶好の機会だ。願くば、教育者よ、時勢に明らかなれ。そして願くば強かれ。（為藤）

周知の通り1925（大正14）年は加藤高明内閣によつていわゆる普通選挙法⁹が制定された年であり、同法によりそれまでの納税額による制限は撤廃され、満25歳以上の成人男性に選挙権が与えられた。当時の時代思潮の下で教育者達に時勢を伝え、それによつて「求めたる教育」にまで進める意図がこの記事から窺える。なお、創刊の辞の上部に掲載された一面記事は、当時の文部次官松浦鉄次郎（談）の「内務警察部長と同格になつた新学務書記官制の精神」¹⁰であり、教育制度の独立を謳う内容であつた。

『教育週報』はその後大川信義や池田種生、中重信、奥田美穂などの記者を抱え、教育学者や教育者からの寄稿も受けて部数を伸ばした。『教育週報』が終刊に向つた背景は、戦時下の出版統制にあると指摘される¹¹。創業者の為藤五郎は1941（昭和16）年に死去しており、出版界への規制によつて終刊時には他紙の多くが出版を停止している時勢であつた。1944（昭和19）年の終刊の辞では、戦局が決戦段階に入ったことを受け、あらゆる資材、あらゆる労力を生産増強に集中する国策に基づき「出版界に昨年来企業整備が計画され、日本出版会が中心となつてその計画の実現に努力してゐる。わが社は茲に見る所あり慎重熟議の結果、国家の要請に應へて『教育週報』を廃刊することに決した。」¹²と述べられている。

2. 児玉九十関連記事と『教育週報』における児玉九十の人物評

ここでは『教育週報』における児玉九十の関連記事の中で、児玉を記事の対象としたものを検討したい。児玉談、もしくは児玉による寄稿の記事は次稿で扱うため一覧には含めない。まず、児玉を対象とした記事は以下のとおりである。

号	(面)	発行年	月	日	記事名	備考
355	(7)	1932	3	5	人物の片影 (三五五) 新寺子屋教育の児玉九十君	人物評
434	(1)	1933	9	9	漫画にして (二三) 児玉九十氏	人物評
610	(4)	1937	1	23	児玉九十氏の『両親教育』を読む	書評
722	(4)	1939	3	18	児玉九十著 教育者としての母	書評
731	(1)	1939	5	20	対話の印象 (36) 児玉九十君	人物評
813	(7)	1940	12	15	翼賛会の臨時協力会議員 教育界から児玉氏たゞ一人 人選の跡を見る	後半は人物評
815	(2)	1941	1	1	教育評論家協会 下中、児玉氏に聴く 廿一日、例会	動静
867	(3)	1941	12	27	第二回協力会議教育関連議題 (三) 学徒の銃後協力体制強化に関する件	動静
948	(1)	1943	7	17	決戦教育の確立を議題 中央協力会議にみる 生産増強に対する学徒動員を即時に断行する件	議題

表1 児玉を対象とした『教育週報』記事一覧

児玉が初めて『教育週報』に登場するのは、1932 (昭和7) 年の355号であり、1943 (昭和18) 年までに計9本の記事で取り上げられている。これらの中で、児玉九十に関する評価を扱ったものに注目すると、「人物の片影 (三五五) 新寺子屋教育の児玉九十君」(355号)、「漫画にして (二三) 児玉九十氏」(434号)、「対話の印象 (36) 児玉九十君」は児玉の人物評を扱った記事であり、「児玉九十氏の『両親教育』を読む」(610号)、「児玉九十著 教育者としての母」(722号) は児玉による著作の書評である。これらの記事を中心に、『教育週報』における児玉九十評価を論じた上で、最後に「翼賛会の臨時協力会議員 教育界から児玉氏たゞ一人 人選の跡を見る」(813号) を検討する。

まず、「人物の片影 (三五五) 新寺子屋教育の児玉九十君」について検討する。『教育週報』では「人物の片影」と題する教育関係者の人物評を創刊時から連載しており、掲載号数と同じ番号が表題につけられている。この記事において、児玉は「新寺子屋教育の児玉九十君」と紹介され、顔写真も掲載されている。写真と記事の全文は以下のとおりである¹³。(□は欠字もしくは印字不鮮明で判読不能)



図1 「人物の片影 (三五五) 新寺子屋教育の児玉九十君」掲載写真

▽ 帝都の西の関門、新宿駅を西に距る省電三十分、国分寺、府中両町の間々に位する雑木林の中に、閑静な学舎がある。名づけて明星 (めいせい) 中学校といふ。

- ▽ 同校は、全国的には或はまだ、左程有名になつて居ないかも知れぬ。
- ▽ けれどもその教育方針が他の中学校に見られない特色を有し、しかも、着々その教育効果を揚げつゝある点は確かに注目に値する。
- ▽ 特色とは何か。それは生徒の自治と実践とを重んじ、訓育に努めて居ることである。
- ▽ 同校では、その教育の徹底を期せんがために、特に寄宿教育を重視し、すでは全校四分の一の生徒を之に収容して居る。
- ▽ いはゞ、昭和における新寺子屋教育がこゝで行はれてゐる訳である。
- ▽ さうした教育の創始者であり、現に校長として一意生徒の指導訓育に没頭している人。
- ▽ それは今茲に紹介しようとする児玉九十君である。
- ▽ 君は一体どうして斯様な教育を始めることになつたのであらう。
- ▽ 君は本当は教育島の所産ではない。東大文科で東洋史を専攻したものである。
- ▽ が、中学時代から教育には興味を持つて居た。それで、大学を出ると、当時中村春二氏の主催して居た成蹊□園に□鞭を執る身となつた。
- ▽ 教育十年、中村園長の片腕となつて、その教育理想の發揮に協力した。
- ▽ 然るに、中村園長没後学園の空気が変になつたので、君は断然辞職して外遊の途に上つた
- ▽ 一年にして帰朝。君はその教育理想を理解する後援者を得無条件に三十萬金を一任されて同校を創設した。それは昭和二年四月であつた。
- ▽ 五分刈頭に、顎から頬にかけて強さうなひげの剃り痕。一見野性味たつぷりである。
- ▽ しかし君は、不作法な荒武者ではない。節度ある東洋式紳士である。
- ▽ 対者に墻壁を造らせない、人なつこい語調でよく語る。その話題は滾々として尽きぬ。
- ▽ 校長ぶらぬことも君の一つの特徴である。朝夕の黙禱、凝念は君自ら之を指揮する。毎朝生徒の先頭に立つて、千五百米突の駆足をする。また、職員生徒の競技の際には審判官にもなる。
- ▽ 『私は好きでこの仕事をやつて居るのです。』と。君の面影をよく表はしている。

明星中学校は、1923（大正12）年に開校した明星実務学校を前身として、1927（昭和2）年に開校した。記事は開校から5年を経た時期の明星中学校について「全国的には或はまだ、左程有名になつて居ないかも知れぬ。」と論じている。この記事は創設当初の明星中学校に対する教育関係者の評価の一つとしても位置付けられるものであろう。1927（昭和2）年開校時の明星中学校に関しては読売新聞の記事があるが、わずか7行95文字の記事で開校の事実のみを伝えるものであった¹⁴。これと比べると、『教育週報』の記事は同校の教育活動の実態も併せて紹介する内容である。

また、学校長の児玉の学歴については、東京帝国大学で東洋史を修めた人物であり「君は本当は教育島の所産ではない」と評している。これは、同時期の教育学者や教育者のように、帝国大学で教育学を修めたり師範学校で学んだわけではないことを意味していると考えられる。児玉が学んだ明治後期から大正期の教員養成制度には、官立の師範学校の他にも臨時教員養成所などがあつたが、児玉はいずれも経験せずに教育現場に入った。そして、大正新教育運動の先駆者であり、自力教育、少人数教育、東洋的鍛錬主義といった主張で知られた中村春二の成蹊学園で教職生活を送り、海外視察を経て学校を設立するに至った経緯が述べられている。「朝夕の黙禱、凝念は君自ら之を指揮する。」とされる教育法も、中村の成蹊学園との共通点が見られるものである¹⁵。当時の児玉の年齢は40代前半であり、「私は好きでこの仕事をやつて居るのです。」をはじめとする描写は壮年期の児玉の教育的態度を伝える内容である。



図2 「漫画にして (二三)」掲載肖像画

次に、1933 (昭和8) 年9月の『教育週報』434号「漫画にして (二三)」は、以下の教育関係者の似顔絵を掲載して人物の雰囲気を紹介する記事であり、児玉九十の似顔絵の横に紹介文が記されている¹⁶。

漫画にして

(二三) 児玉九十氏 どこを探しても、衒気や、粉飾や、作為のない顔、大きな平野の前に立った様な感じである。
(明星中学校長)

児玉はこれより4か月前の『教育週報』397号で「財団法人と私学の経営 諸家座談会」に登場し、はじめて同紙に自身の考えを披露している。また、前述の「人物の片影」に紹介されてからは1年半が経過しているが、その時の人物評と共通する評価である。なお、これらの紹介段階を経て、同1933 (昭和8) 年11月には、児玉初の巻頭記事「私学審査会の提唱」を寄稿し、以後継続的に紙面に登場することになる。

次に、1939 (昭和14) 年の731号「対話の印象 (36) 児玉九十君」は、児玉が『教育週報』の常連になった後の人物評価である。この記事までに児玉は座談会や寄稿など計32本の記事に登場している。「対話の印象 (36) 児玉九十君」の全文は以下の通りである¹⁷。

明星中学校長児玉九十さんは、その昔成蹊学園の創立された時、中村さんの片腕となつて理想の教育建設に邁進した人である。中村さんの没後学園の経営が他に移り教育方針も変つたので児玉さんは断然退職したといふ。其後実業家の星^(ママ)さんから無条件で三十萬金の提供を受て、明星中学校を創設し独特の人物教育を打ち立て、居る。

その経歴が物語るやうに、児玉さんは文字通りに真面目な東洋的精神家である。イガグリ頭で赭黒い顔、男性的な風貌のうちに温厚さを湛へて居る。言葉づかひなど極めて懇懇で、応接の態度も折目正しい。けれども窮屈で肩の張るやうなことはない。所謂策を弄するといふ様なことは微塵もない人だから、こちらでも思つてゐることは気兼ねなくスラ、と言へる。

人生問題、教育問題その他各種の問題について、しつかりした考へを有つてゐて、叩くに従つて親切にそれを吐露してくれる。その話しぶりも、干からびた道学者的お談議でなく、耳をひきつける潤ひをもつてゐる。

「実業家の星さん」とは、学校設立時の支援者であつた実業家星野鏡三郎のことであろう。「独特の人物教育」という記述は、後に続く文から児玉が東洋史を専攻した点によるところが大きいと考えられる。また、「干からびた道学

者のお談議でなく、耳をひきつける潤ひをもつてゐる。」との記述からは、明治以来の近代教育の中で儒学をはじめとする東洋思想が高遠で難解な過去の遺物と評価される中で、児玉は実践的な人物であったという評価である。

以上、3点の記事を検討すると、『教育週報』の児玉九十評は人物的魅力が共通して指摘されていることがわかる。また、東洋史を修めた点は漫画以外の2つの記事に共通して児玉の特徴として描かれている。一方で、355号で見られた児玉が純粋な教育畑出身者ではない点についての言及が731号にはない。この背景には、児玉が10年以上にわたり学校経営を安定的に成功させたことや、『教育週報』内外での執筆活動、教育活動を行ったことが関係していると推察できる。

3. 『教育週報』における児玉九十著作の書評

次に、児玉九十著作に関する書評について検討したい。1937(昭和12)年の『教育週報』610号には為藤十郎による「児玉九十氏の『両親教育』を読む」が掲載されている。為藤十郎は為藤五郎の従兄にあたり、福岡師範学校を卒業後に教職を経て1926(大正15)年に入社しており、教育週報における主要な記者のひとりとして評価され、『教育週報』終刊時には社長も務めていた人物である¹⁸。書評欄の冒頭には「問題の出版物—厳評」との見出しがあり、「この欄では、出版物中、何等かの意□で問題になつて居るもの、話題に上つて居るもの、評判になつて居るものを厳正に批評し、教育家、読書子の参考に資する。その結果がその出版物の宣伝にならうと、或は却つて実行に打撃を受けようと、それは関知せざる所である。真か贋か、玉か石かを点検すればよい。」(□は印字不鮮明で判読不能)と述べられている。やや長文であるが記事の全文は以下の通りである¹⁹。

私立明星中学校長児玉九十氏著『両親教育』が出た。本書は、氏が雑誌『主婦之友』誌上に連載した両親に対する教育意見(約一年有半の分)に若干の補正を加へ、纏めて一冊としたものである。

氏は東京帝大の出身で。^(ママ)卒業後故中村春二氏の創設にかゝる成蹊学園に赴き、中村氏の片腕となつて生徒の薫陶に努めた。在職十ヶ年、感ずる所あつて退職、欧米教育視察の途に就いた。帰朝後、実業家故星野鏡三郎氏と相知り、氏より無条件に三十萬金を一任されて、昭和二年四月明星中学校を創立した。以来今日に至るまで、生徒の自治と実践とを重んずる体験主義の教育は、益々その成績を挙げ、各方面に注目されて居る。

×

氏は、『教育は、師たる先生が、家庭及び社会の協力の下に、青少年をしつかりした人物、即ち頼もしき国民に作り上げる作用』であるとし、就中家庭の助力を得ることは割合に困難が少く且つ有効だと見て居る。そこで氏の学校では年に五回の定期父兄会を開いた上に、出来るだけ度々学校を参観するやうに奨励し、之によつて、両親の教育的自覚を喚起し、生徒の教育に遺漏なきやうに努めて居る氏はまた『思惟と実行とは、一貫して切離し得ざるもの、また切離すべからざるもの』との堅い信念を持ち、之に基いて生徒の教育を進めて居る。従つて本書も、自己反省、実践躬行、示範指導というやうな点を骨子として論述されている。

×

本書は、前述の如く、世間多数の両親を教育する意図の下に、婦人雑誌に連載したものであるから素より系統的、組織的に教育の学を講じたのではない。故にその構成も序論、本論、結論といふ様な順序を逐はず、著者が必要と認めた題材を羅列的に並べてあるやうである。その論述ぶりも、抽象的な難解な概念論を避け、多数の実例を用意して具体的記述をなすことに努めて居る。

その文章も、一般の両親に向くやうに、極めて平易明快な話語体とし、振仮名もつけてある。文章の姿も恭敬な中に潤ひもあり又張りもあるので、気持ちよく読み味ふことが出来る。

本書の表現はまことに平易であるが、その中に盛られた内容は決して低俗ではない。透徹した人生観、社会観、教育観、宗教観等が躍如として字句の間に脈博つて居て、静かにこれを繙けば、考へさせられるものが少くない。

×

開巻第一に、上級学校に入れることが即ち教育だ、と考え違ひをして居る多数の父母に対して、学校のすべてが必ずしも教育をするものだとは限らない、日本中至る所に『大学出の無教育者』が氾濫して居るではないか、と猛省を促して居るところ、先づ共鳴を起させる。次で、その子を漫然と上級学校へ入れる親、受験の時だけ熱心で、入学後教育に冷淡になる母親に対する痛棒など急所を突いて居る。

続いて、家庭教育の根本から、如何なる人間を作るべきか、我が子を成功させる道はどうか、子供はなぜ親の思通りにならなかつたり親から離反したりするか、子供の叱り方と褒め方は、休暇中の導き方は等々多方面に亘つて、前に例示したやうな工合で、平静な中にキビ、キビとした指導態度を見せて居る。茲こそそれらについての色々な具体例を挙示する余裕のないのが遺憾である。

×

次に、人の親の最も悩みとする子女の思春期の導き方、異性に対する問題については、氏は如何なる指導を与へて居るか。

異性に対する教育については、男女の互尊互敬を基礎とした的確な意見が述べられ、殊に日本の男性に対しては、三省すべき多くのものが与へられてある。思春期の男女に対する父母教師の指導法、性教育の仕方に就ても相当細かに述べてある。就中『性の欲望を、汚いもの恥づべきものと、否定してはならぬ』として居る所、舊道徳者には見られぬ見識である。たゞ、どういふわけか、恋愛に関しては一言も言及して居ない。氏は青年男女の恋愛を是とするか否とするか。仮りに是とするならば、恋愛しつゝある男女を如何なる態度で指導するか。それらの男女の親に対しては如何なる指導を与へるか。この辺の意見を開陳されたならば更に有効であらうと思ふ。ともあれ、本書を世の父母教師に推奨することを筆者は躊躇しないものである。

この書評では、児玉にとって初の体系的な教育著作となった『両親教育』が、教育実践を土台とした啓蒙書であったことを指摘している。『両親教育』は1936(昭和11)年11月に発行され、1938(昭和13)年12月には10版を重ね、1940(昭和15)年には増補16版が出版されるなど、児玉の代表作となった。この記事は同書に関する初期の書評と位置づけることができる。

また、記事の冒頭で児玉の明星中学校の教育方針に言及し、『両親教育』の土台となった、家庭の助力を得ることのできる学校経営の手腕も紹介している点は、人物評にも相当する。これらの記述は、主として『両親教育』の序文である「自序」の内容をほぼ紹介する形式を取っている²⁰。加えて、「異性に対する教育」については、東洋思想を専攻した児玉が旧式の道徳を奉じる人物ではなく、当時としては実践的な見識を持っていたことを評価している。なお、同1937(昭和12)年1月13日の読売新聞11面に掲載された霜田静志²¹の書評記事「児玉九十氏の著 両親教育」²²に比べると、全体の分量が多く児玉自身に対する紹介も詳しい。教育専門紙と一般紙の相違はあるが、比較すると『教育週報』の記述が充実しているといえる。

次に児玉の著作に関する書評が登場するのは1939(昭和14)年3月の『教育週報』722号における「児玉九十著 教育者としての母」である。この記事には執筆責任者の表示はない。全文は以下の通りである²³。

著者児玉氏は昭和十年五月以来雑誌『主婦之友』誌上に連載した両親に対する教育講話をまとめて『両親教育』と題して出版した。一昨々年の暮であつた。その後同誌への講話掲載はなほ続けられて今日に至つてゐるが、その出版を希望する者が多いので、前著の続編といったやうな意味で、雑誌記事に補正を加へて一冊に纏めた。そ

れが本書である。氏の両親教育に対する深い研究と経験とはすでに定評の存する所であり、それに種々な重要問題が、平易にしてしかも興味ある口語文によつて書き表されてゐるので、易々と読んで行く間に、親としての心得べき数々のものを訓へられる。氏は『私は、研究と経験とによつて明かにされた道理は、何事によらず、少数の人々が独占してゐるべきものではなく、萬人に伝えて世の向上進歩に資すべきものといふ信念を持つてをります』云々と述べてゐる。本書はかうした信念の下に出されたものである。(東京市神田区駿河台、主婦之友社、定価一円三十銭)

『教育者としての母』は『両親教育』と同様に『主婦之友』の連載記事を土台に加筆して出版したものである。原著の表紙には表題の「教育者としての母」の下に「続両親教育」の副題が見られる。また、記事末尾の「氏は『私は(略)』云々と述べてゐる。」は、同書の序から引用したものである²⁴。書評の分量は『両親教育』と比べると少ないが、『教育者としての母』の分量も『両親教育』より少ないものであった。しかし、「氏の両親教育に対する深い研究と経験とはすでに定評の存する所」であると述べられていることから、同書への評価に加えて、児玉の教育者としての実績が「定評」のあるものと評されていることを示す資料である。

『両親教育』と『教育者としての母』は、後に『児玉九十自伝』において児玉の代表的著作と位置付けられるものである²⁵。出版当時に反響のあったこれら2点の書評の後に、上述した「対話の印象(36) 児玉九十君」が掲載されていることから、そこには書評による評価が反映されていたと考えられる。

4. 児玉九十の人物評の変遷

最後に、記事の中に児玉の人物評が含まれる1940年の第813号「翼賛会の臨時協力会議員 教育界から児玉氏たゞ一人 人選の跡を見る」について検討したい。この記事には直前に「協力会議へ教育者の叫び 翼賛会は広義の教育運動(唯一の教育代表) 児玉九十氏談」と題する児玉談の記事があり、両者は関連する内容であるため記事名から併記する。この記事は児玉談であるため表1には含めていないが、その前半部が記者による児玉の人物評であるためここで検討したい。なお、大政翼賛会²⁶と児玉の関係については、すでに『児玉九十自伝』や『明星ものがたり』で明らかにされている²⁷。

記事の冒頭には児玉の写真が掲載されており、その全文は以下の通りである²⁸。(□は欠字もしくは印字不鮮明で判読不能)

協力会議へ教育者の叫び

翼賛会は広義の教育運動

(唯一の教育代表) 児玉九十氏談

大政翼賛会に教育者の姿が見られなかつた事は、教育界及び一般から教育の地位の不鮮明な点に就き非常に遺憾に思はれ、参加の要望が熱烈に叫ばれてゐた折柄今回臨時中央協力会議員として、私立明星中学校長児玉九十氏が選ばれた事は、本邦教育界にとり、その将来の活動分野に対する曙光を見出したものとして非常に歓迎されてゐる。これに就て当の児玉九十氏を府中の明星中学校に訪れると五分刈りの大きな白髪交りを紅潮させて、一別に突然に抱負をといはれても従来やり来つた事以外にはないが、『^{ママ}』と過去の教育報国三十年の一貫した主義主張を説き、将来の協力会議員としての抱負を語つた。

『之を要するに私の踏んできた体験教育の真髓は王陽明先生の知行合一の教育、実践躬行、同行一体の教育によつて皇国民を錬成するにある。抱負という程でもないが、翼賛会の教育方面への行き方としては、広義の教育

が社会生活の総ての事に於て行はれる事を考へると私のこの体験同行主義を総ての行動に及ぼして行き度い。教育界一般の問題の方面は、教師の全国的不足、師範志望者の減少、教師の素質低下等は差当つて協力を要する問題であり、之が解決は人材の一方的偏在防止、待遇の改善に意を用ひなければならぬと思ふ、次に翼賛会並に新体制の趣旨が地方に未だ徹底した理解にまで達してゐない、不安を抱いてゐる向がかなりある、これに対して極力正しい理解を持たせ一億一心協力邁進の歩を進める様に出来るだけ早くしなければいけないと考へる。兎も角新体制の目標は臣道実践である。総ての人が教育者になつたつもりでやつて行く、翼賛会は広義の教育運動だと思ふ、導き導かれるのだ。こゝを真に指導階級が考へ総て世の中は教育の関係にあることを知り、官庁から実践躬行し、新体制といふ再教育をしなければならぬ、兎も角教育の極めて大切なる事を鼓吹せねばならぬと思ふ。』云々。(写真は児玉氏)

翼賛会の臨時協力会議員

教育界から児玉氏たゞ一人

人選の跡を見る

近衛総裁の指名といふ名の下にいよゝゝ大政翼賛会の臨時中央協力会議員何十名かゞ、ずらりと発表された。準備会から総務、次には局長、部長など次々に人選が発表せられ、その機構と会議は着々進捗しつゝある様に見たるが、その人選と機構の発表せらるゝ毎に、教育界のみは何時も暗い気持ちにのみ襲はれて来た。それは機構の中に教育の『教』の字もなく、随つて人選にも教育人は例外なく置去りにされて来たからである。ところがこのたび臨時中央協力会議員の指名が発表されるに及び、やつと初めて教育者の名が現はれて来た。しかし数はたつた一人。新聞を見ると学校関係といふ名の下にさも教育界の職能代表者が四五名も指名された様に報道した向きもあつたが、学校関係は学校関係であつても生粋の教育者といふものは私立明星中学校長の児玉九十氏がたつた一人。即ち他に慶応大学長の小泉信三、早稲田大学教授の中野登美雄、日本女子大学講師の高良富子の諸公。他に下中彌三郎氏の名も見たるが、下中氏は教育界出身ではあつても、現在の活動分野は遙かにそれを逸脱して居る。偕てその人選の跡を見ると、標準は何によつたものか、また何人の推薦によつたものか。前記数氏とも人物としては先づ無難といふよりは公正妥当なりと言つてよからうが、たゞ揃ひも揃つて一人の官公立学校職員から選ばず、悉く私立学校に白羽の矢を立てたところには何か仔細があるのであらうか。官公立学校は政府部内といふ意味があるから、何時でも意見を徴し得るといふならば、総務の中に平賀東大総長たゞ一人を選んで、私立学校をオミットしたことが腑に落ちかねる。それとも協力会議には私立学校の中から澆刺たる意見を徴するといふのだつたら了解が出来ないこともない。偕て次はその個々の人選だが、前述の様に何れも実力を具備した有数の人物たることに異議はないが、早稲田から中野教授を抜擢するならば慶応からはこれと相棒たる新進の加田教授を何故抜擢しなかつたか。慶応から小泉総長を指名するな□ば何故早稲田からは田中総長を抜擢しなかつたか。いささか老人過ぎるといふならば、杉森孝次郎氏あたりを指名したならば権衡も取れたらうし、翼賛会の知恵として杉森氏位の適任者はないと思はれるのだが。最も中野登美雄教授は夙に国家主義力説の政治学者としての売出し学徒ではあり、翼賛会向きに出来て居る少壮学者ある点が大に買はれたのであらうか。唯一の女性高良氏は教育界の主流とは縁遠い存在であり、この人が教育界の職能代表であらうとは誰も考へもしまいが、これは女性を代表する唯一人物として選ばれたのであらう。さうした場合そんぢよそこいらの有名婦人や、委員専門業の婦人に優ること数等であると言へよう。偕てそこで唯一人の生粋の教育者児玉九十氏のことであるが、唯一人としての場合は必ずしも最後□て残さるべき最上最優の候補者とは言はれないにしても、協力会議の議員としては、他の各職能代表に比して、決して遜色のある存在ではない。教育に対する信念、体験、過去の行動、更に時局に対する認識等々の点に於て、教育界の名を断じて恥かしめることなき有能者有徳者であることに氏を知る程の

人々は異議を挿む人はあるまい。願くば唯一人の代表者であるといふ重大使命をしっかりと果して欲しいものだ。

当時は近衛文麿内閣による新体制運動があり、紙面に現れる言葉にも世相を反映した表現が見られるようになる。これらの記事の冒頭と末尾の記述は児玉の人物評としての役割を果たしている。『児玉九十自伝』では、この時の児玉に求められた立場について、「各界代表の百六名のひとりとして、中学、高女、実業学校、青年学校、小学校を代表する議員ということでした」と記している²⁹。

2つの記事を概観すると、前半の記事は「私立明星中学校長児玉九十氏が選ばれた事は、本邦教育界にとり、その将来の活動分野に曙光を見出したものとして非常に歓迎されてゐる。」と述べ、児玉の議員就任を評価した上でその抱負を掲載している。後半の記事は、人選全般についての疑問を呈しつつ、児玉のことを「生粋の教育者」と評価し、「最上最優の候補者とは言はれないにしても、協力者会議の議員としては、他の職能代表に比して、決して遜色のある存在ではない」と論じている。また、「教育に対する信念、体験、過去の行動、更に時局に対する認識等々の点に於て、教育界の名を断じて恥かしめることなき有能者有徳者であることに氏を知る程の人々は異議を挿む人はあるまい。」という点は、児玉を教育者出身の議員として称賛しているものである。一方で、「最上最優の候補者とは言はれないにしても、協力会議の議員としては、他の各職能代表に比して、決して遜色のある存在ではない。」という点は、他の議員や教育者全体と比較したうえでの児玉の位置づけと見ることができる。この記事は、かつて「人物の片影（三五五）新寺子屋教育の児玉九十君」（355号）において「君は本当は教育島の所産ではない」と評された児玉が、教育者の代表として一定の評価を受ける立場になったことを意味している。

おわりに

『教育週報』における児玉九十評価を概観すると、その教育実践は成蹊実務学校での教歴や東京帝国大学で東洋史を専攻したことが土台であると指摘され、「教育島」の出身者ではないという評価から始まった。しかし、その後の『教育週報』への寄稿や明星中学校での教育実践、『両親教育』と『教育者としての母』の出版などを経て、最終的には教育の代表者として恥じることのない人物という評価へと高まっていった。

また、『教育週報』の記事は、同時期の一般紙である『読売新聞』の記事と比較して、児玉の評価を詳細に取り上げている。これは、戦前における教育専門紙の児玉九十評価として位置付けることができるであろう。

本稿では『教育週報』の児玉九十による個々の寄稿が具体的にどのような影響を与えたかについては十分に言及し得なかったため、次稿において論究したい。

注

- 1 廣嶋龍太郎「児玉九十著作目録の再検討（1）」『明星—明星大学明星教育センター研究紀要』（4）、2014年、1-10頁。なお、『教育週報』のほかにも複数の寄稿が見られるものには『大法輪』『体験教育』『新更論集』『帝国教育』『修学旅行』『中学時代』『高校時代』『教育と宗教』『仏教文化』『全国学園新聞』『私学時報』『いのち』が挙げられる。
- 2 明星学苑編集委員会『この道五十年』1965年、447-450頁。原典は「学制改革の重点」『教育週報』（659）、1938年。なお、原典にある「の」の文字は『この道五十年』に表記されていない。
- 3 同上書、457-460頁。原典は「長期建設に対応する教育（二）」『教育週報』（707）、1938年。原題には「（二）」の文字が入る。
- 4 同上書、461-464頁。原典は「わが校の非常時教育（其七） 明星中学校」『教育週報』（702）、1938年。原題には「（其

七) 明星中学校」の文字が入る。

- 5 同上書、487-491 頁。原典は「中央協力会議に於ける中等学校入学問題」『教育週報』(846)、1941 年。原題には「入学」の文字が入る。
- 6 中野光監修『教育週報 解説・総目次・索引』大空社、1994 年、363 頁。前田一男は教育週報社の編集体制は充実していたとしながらも、「教育週報社にどのような人々がいつからいつまでいたのかという正確な事実はわからない。」としている。
- 7 中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報』第 1 巻、大空社、1986 年、巻頭。なお、巻頭の「『教育週報』復刻にあたって」は、全巻の巻頭に示されている。
- 8 為藤五郎編『教育週報』(1)、1925 年、1 面。(前掲『教育週報』第 1 巻所収)
- 9 正式には衆議院議員選挙法を全部改正して成立した法律であり、その背景には普通選挙の実施を求める普選運動の高まりがあった。
- 10 前掲『教育週報』(1)、1 面。
- 11 中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報 解説・総目次・索引』大空社、1994 年、337 頁。
- 12 為藤十郎編『教育週報』(974)、1944 年、1 面。(中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報』第 19 巻、大空社、1986 年所収)
- 13 為藤五郎編『教育週報』(355)、1932 年、4 面。(中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報』第 8 巻、大空社、1986 年所収)
- 14 『読売新聞』(17959)、1927 年 3 月 7 日、11 面。記事の全文は次の通りである。
明星中学校 昨春欧米視察から帰朝した前成蹊学園長文学士児玉九十氏は今度実業家星野鏡三郎氏の後援で府下府中町に明星中学校を創設し文部大臣の認可を得て四月から開校、新しい抱負で教育に当るさうである
- 15 『児玉九十自伝』には「本校独特の凝念」との記述もある。(児玉九十伝編纂委員会編『児玉九十自伝』明星大学出版部、1990 年、217 頁。)しかし、小室によると、「凝念法は中村が成蹊実務学校創立の明治 45 年に考案し、実務学校で実施し、大正 3 年の中学校設立に際しても重要行事としてとりいれたものであった。」とされる。両者の凝念には、座禅をモデルとしている点や端座や精神統一の作法の点に共通が見られる。(小室弘毅「中村春二の教育思想と凝念法」『東京大学大学院教育学研究科教育学研究室研究室紀要』(31)、2005、25 頁。)
- 16 為藤五郎編『教育週報』(434)、1933 年、1 面。(中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報』第 9 巻、大空社、1986 年所収)
- 17 為藤五郎編『教育週報』(731)、1939 年、1 面。(中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報』第 15 巻、大空社、1986 年所収)
- 18 前掲『教育週報 解説・総目次・索引』363 頁。
- 19 為藤五郎編、『教育週報』(610)、1937 年、4 面。(中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報』第 13 巻、大空社、1985 年所収)
- 20 児玉九十『両親教育』増補 16 版、主婦之友社、1940 年、1-4 頁。なお、増補版にも初版と同じ「昭和十一年十一月十日」と記された「自序」が掲載されている。
- 21 霜田静志は昭和期の教育者であり、小・中学校教師を経て東京帝国大学で美学・心理学を研究し、1933 (昭和 3) 年に英国へ留学した人物であり、帰国後は主婦之友社で児童相談を担当していた。
- 22 『読売新聞』(21531)、1937 年 1 月 13 日、11 面。記事の全文は次の通りである。

親として我が子のためによかれかしと祈らぬものはない。それにも拘はらず屢ば子は親に反いて、親が期待したのと全く違ふ方向に行つてしまふ。抑もそれは何によるか。それは、親が子を理解せず、すること為すこと余

りに近視眼的だからである。

或親は、自分の子供を、評判のよい学校に入れたいばかりに、無理な勉強を強ひて居る。また、或親は自分の子供を、唯々競争に打ち勝つよき成績を獲得せしむる事にばかり駆り立て、他人を踏み倒しても自分さへよければよいといふ利己主義にし人物を作ることに考へ及ばない

斯ういふ現状を屢ば目撃するにつけても、私はこの「両親教育」を特に世の親達に推奨したく思ふ本書は我子のために心を砕く両親のための書として、著者の長き教育生活の体験に基き様々なる角度から徹底的に説いたものである。

而も著者は単なる空理空論ではなしに、様々な実例によつて之を説いて居る。例へば、子供はなぜ親の思ひ通りにならぬか、子供の叱り方褒め方はどうするがよいか、成績不良の子はどう導けばよいか、と言つたやうな項目について一々具体的に懇切に説いて居る。されば読者は興味深く之を読んで行くうちに、いつか教育の真諦に到達するであらう。(定価一・二〇神田区駿河台主婦之友社発行)

- 23 為藤五郎編『教育週報』(722)、1939年、4面。(前掲『教育週報』第15巻所収)
- 24 児玉九十『教育者としての母』主婦之友社、1939年、2頁。
- 25 前掲『児玉九十自伝』522頁。
- 26 周知の通り、大政翼賛会は1940(昭和15)年に第二次近衛文磨内閣によって新体制運動を推進するために設立された組織である。総力戦争を遂行するために一国一党制を実現させようとしていた軍に対して、国民各層の有力な分子を結集して軍に対抗できる強力な国民組織をつくらうとしたものであった。大政翼賛会の総裁は首相が兼任し、国民を大政翼賛運動に組織するために、中央本部、道府県・市町村の支部、そして中央・地方に協力会議を設けることが定められた。なお、成立後には近衛の思惑を外れて政府に指導される公事結社になり、東条英機内閣では国民統制組織としての色彩を強めていった。
- 27 たとえば、『明星ものがたり』において、児玉は「協力会議議員は意見を述べる下情上通の役目ですから努力したものの、翼賛会の役員には、中央・地方のいずれも、絶対に断りました。学校と言う本務を持つ者には両立しないと信じたからでありました。戦後の占領時代のページで私が追放を受けなかったのは、意見を出す議員だけで、役員にはならなかったからだということを知りました。」と述べている。(児玉九十、児玉三夫『明星ものがたり』明星大学出版部、1976年、74頁。)
- 28 為藤五郎編『教育週報』(813)、1940年、7面。(中野光監修、中野光・前田一男解説『教育週報』第16巻、大空社、1986年所収)
- 29 前掲『児玉九十自伝』259頁。

追記

本稿を執筆するにあたり、当時教育学科4年生だった貞清裕介君と松崎遼大朗君に資料整理を手伝ってもらった。また、『教育週報』の児玉九十の写真と肖像画を掲載するにあたっては、大空社の西田和子様にご配慮いただいた。深く感謝を申し上げます。